

退職後には... 現職とどのようにつながるか 好きなことへの取り組みが大切

副会長 田中正

十一月十三、十四日に高松市で八十三名(高退協からは八名参加)の参加で開催されました。コーラスグループ「エプロン」による「花は咲く」などの優しい合唱に疲れを癒され、また「日本国憲法第九条」には背筋を伸ばされる思いでした。続けて当番県の香川(高)小田会長、全退教四プロ山中幹事から挨拶があり、各県組織の報告を聞きました。

楽しい活動を中心に、と様々な行事を展開されている香川退教協や香川高退協の報告をはじめ、各県の活動や状況がよく分かりました。高知高退協は、一年間の活動や行事を田中が報告しましたが、山下会員や幡多ゼミの取り組みが映画化された「種まきうさぎ」の宣伝もしてきました。

分散会は、三つに分かれて開かれました。第一分散会では、退職後に現職とのつながりをどう持っていくのか、どう励まし、どう具体的に手助けをするのか、といった話や退職後は好きなことへの取り組みが大切、などの話がされました。第二分散会は、九条の会などの外に向かっただけの活動の大切さや会員増やしなどの内の組織の活動の重要性が話されました。第三分散会は、高松城(玉藻城)見学でした。城の歴史、城壁の変遷、城の仕組み、堀や天守閣復元の取り組み、景観との関係など香川高退協の会員から熱心で分かりやすい説明がありました。夜は懇親会でした。各県組織の工夫した出し物があり、高知高退協も別役さんの構成・演出による朗読「平和へ」五分間の奇跡「」を演じ、大きな拍手をいただきました。各県から自慢の一本(酒)も持ち寄り、また手ケンなども差し入れし、盛大に楽しいひと時を過ごしました。二日目は、記念講演があり

ました。「高松大空襲・七月四日深夜に空から戦争が降ってきた」という演題で高松空襲を子どもたちに伝える会」会長の植田さんがお話しされました。植田さんは、市街地の八割を焼き、被災建物一万九千戸、被災者八万六千人、死者千三百人という高松空襲の悲惨さと人命無視の防空対策などを説明、戦争や空襲の残酷性や悲惨さをきちんと調査し、正確に記録し、語り部として後世に伝えていきたい、と訴えられました。

楽しく、意義のある交流集会でした。(来年開催するかどうかが未定ですが、次回は県退教が主催で高知開催になります。多くの会員の参加を期待します。)

高教組香長支部 鍋登山

てっぺんで食べるキノコ鍋は格別

小松 茂弘

高教組香長支部の秋の鍋登山が、11月3日、秋晴れの下、冬枯れの稲葉山1506mで行われました。高教組と連帯する高退協から4名が参加しました。20年くらい前から、香長支部のレクレーション行事として毎年連綿と続いている行事です。春は山頂で天ぷらを揚げて楽しみ、秋は豚汁やイノシシ鍋、雑鍋など鍋を囲んで楽しんでいきます。雨降りや積雪などの天候の不

良で、山あるきをせずに飲み会になったこともありましたが、昨年は、山の上でなぜ海鮮鍋なのかと言われましたので、今回は、片道90分程度で山頂に着くルートを選び、秋にふさわしくキノコ鍋をてっぺんで作って食べました。



鍋登山に参加された高退協の皆さん

参加した上村理恵さんの感想「登山道は日差しで明るく、カラフルな落ち葉でふかふかでした。気温は11度でしたが、1時間も歩くとも身体はポカポカに。天気に恵まれ、笹ヶ峰平家平、寒風山等、山並みが綺麗にみえました。山頂で食べたきのこ鍋はとっても美味しかったです。帰り道は、クリスマスリースを作るツタを取りながら下山しました。

12・8 平和のつどいから
世界に向けて行動を
別役 美佐
若手のギターリスト佐伯北斗さんの演奏で始まった「第20回 平和のつどい」は、12月7日、高新文化ホールで開催され、参加者は、190名でした。

講師は、「演題以外にも、話したいことがあります」と第一声を発し、イラク戦争後の惨状と、真実を報じることのないメディアに対して悔しさと怒りを込めて語りました。



演題は、「私が戦場へ行く」と決めた理由(わけ)」。講師は、高遠菜穂子さん(イラク支援ボランティア)でした。彼女は、「命に国境はない」「伝えなければならぬ」という信念でイラクへの支援活動を継続して、今日に至っています。「日本人質事件」として報道された時は、パッシングも受け、戦地よりも日本が怖かったと言います。時を経て、イラク戦争の真相が明らかになるにつれ、現地の惨状(政府軍による市民へのいわれのない空爆)とともに、メディアが、政府軍の非人道的な実態を伝えないことへの憤りと、自分も戦争に加担したのだという思いにさいなまれました。戦争勃発から11年占領の過程で使用された有害兵器(劣化ウラン・白リン弾等)は、深刻な環境汚染を引き起こし、生まれてくる子ども達の遺伝子を傷つけ、先天性異常・小児がんが急増している。また、イラクに派遣された兵士たちの中には、精神に影響を及ぼし、現在は、戦死者より自殺者が勝っている現状が語られた。まさに「戦争は一度始まったら終わらない」と負の連鎖が生々しく語られました。支援活動にあたり、これ以上に、犠牲者を拡大させないように、国連人権委員会や米英政府への情報公開と補償の措置も求めているが、劣化ウラン弾についてWHOは「そのような証拠はない」として認めていないということです。

最後に、日本は、情報量が絶望的に少ない状況であり、それだけに情報を誤ると対応策を誤ってしまう。「知らなかった」では、すまされぬ世界である。日本人が考えている日本と、世界が考えている日本には、大差があり、海外のメディアでは、日本の自衛隊の映像が流れている現実である。「9条」「平和」と声を上げていくが、憲法の前文をもって世界的な視野で行動を起こして欲しいと強く訴えました。